

「たいと思う」の機能拡張の様相に関する分析

－願望表出から実行表明へ－

治田 芽生（北海道大学大学院生）

1. 本研究の目的

従来、「たいと思う」は、話し手の願望という主張を緩和する表現であるとされてきた（森山 1992, 湯本 2004）。一方で、齊藤（2011）では、「たいと思う」が願望表出の緩和だけでなく、行事や会議などの開始・終了などを告げ、事態を進行させる機能を持つ場合があると主張されている。しかしながら、それらの機能ごとの「たいと思う」に見られる特徴の異なりや、それらの機能同士の拡張関係は十分に明らかにされていない。

本研究では、「たいと思う」の用例における発話と行為成立との時間的關係や語形変化にかかる制約を分析することにより、「たいと思う」に、願望表出の緩和機能、行為予告機能、事態進行機能という3つの機能があることを提案する。さらに、事態進行機能に見られる文法化の特徴を観察することで、これらの各機能が、願望表出の緩和機能をプロトタイプとし、そこから連続的に、行為予告機能、事態進行機能が拡張されているという拡張関係を考察し、その拡張の要因を論じる。

2. 分析

2.1 対象データ

本研究では、国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』、『現日研・職場談話コーパス（CWPC）』において、「たいと思う」、「たいと思います」が現れる用例を分析対象とした。日常的な話し言葉の実態をとらえた先述の2つのコーパスを用いることにより、「たいと思う」の実際の使用傾向を踏まえた分析を行った。¹

2.2 発話と行為成立時点の時間的關係

ここでは、「たいと思う」の用例を、Searle（1979）が確立した発話内行為の分類に基づき分析する。Searleの提案した発話内行為には、断定型、指令型、表現型、行為拘束型、宣言型の5つがあるが、「たいと思う」には、そのうち、表現型、行為拘束型、宣言型の3つがあると考えられる。Searle（1979）の発話内行為の分類に基づき、本研究では次のように、「たいと思う」の文の発話内行為を分類した。第一に、「たいと思う」による発話が、願望対象の行為成立を目的とせず、単純にその場における話し手の願望を表す場合には、発話内行為を表現型と判断する。第二に、「たいと思う」による発話が、発話時点以降の話し手の行為を予告することを目的としていれば、発話内行為を行為拘束型と判断する。第三に、「たいと思う」による発話と同時に行為が成立していれば、発話内行為を宣言型と見なす。すなわち、表現型、行為拘束型、宣言型の順に、発話時点と行為成立時点との時間的關係が近くなっていくと考えられる。

以下の表1に、それぞれの発話内行為に該当すると分析した「たいと思う」の文の代表例を提示する。

¹ なお、本稿では、コーパスの原文における言いよどみの部分を適宜修正した。また、例文の後の括弧内に、コーパスの種類（話→『日本語話し言葉コーパス』/職→『現日研・職場談話コーパス』）と講演IDを記す。

表1：発話内行為に基づく「たいと思う」の文の分類

発話内 行為	発話時点と行為成立 時点との関係	例
表現型	行為成立が非現実的, 非明示的	(1) (無人島に持っていきたいものについて話している) 子供の頃から馴れ親しんでる柴犬をできればえ一連れていきたいなと 思います。(話 S07M1558)
行為 拘束型	発話と同じ場面内に 行為成立	(2) (発表の冒頭に、発表の構成について話している) 発表内容の構成ですが、まず背景について述べ、次に対応付け、それから テキスト分割について説明します。そして、え、実験結果を挙げて考 察し、最後にまとめたいと思います。(話 A03M0177)
	発話の直後に 行為成立	(3) 実際にそのニューラルネットワークを用いた 本手法 について説明し たいと思います。本手法では、ニューラルネットワークを用いている為 に…(話 A01M0069)
宣言型	発話と同時に 行為成立	(4) (ミーティングの進行役の発話) ミーティングを始めたいと思います。いつものように定例報告を、A グ ループ長からお願いします。(職 M09A011)

まず、(1)は、無人島に行くとしたらなじみ深い柴犬を連れて行くという話し手の願望を表している。この発話は、そもそも設定が仮想的なものであることから、行為成立を目的とせず、話し手の単純な願望を示しており、表現型の発話内行為をもつ文として判断できる。次に、(2)、(3)は、「たいと思う」の発話によって発話時点より未来の実行が見込まれる行為を予告していることから、行為拘束型と見なした。(2)の「たいと思う」の発話は、その発表内の最後に考察をまとめるという予定を述べている。また(3)のように、「たいと思う」の発話直後にその行為が成立する場合もある。最後に、宣言型の(4)では、「ミーティングを始めたいと思います」という発話と同時に、ミーティングの開始が成立し、その直後からミーティングの内容に入っている。

以上のように、「たいと思う」の文には、行為の成立を意図しない表現型、成立が見込まれる行為を予告する行為拘束型、発話と同時に行為が成立する宣言型が観察できる。これは、「たいと思う」が、願望表出の緩和機能にとどまらない機能をもつことを裏付けており、それらの各機能が、発話と行為成立の時間的關係から見て、連続的に分布していることを示唆している。

2.3 語形変化にかかる制約

次に、前節で確認した表現型、行為拘束型、宣言型の「たいと思う」のそれぞれの例における語形変化にかかる制約を次の2段階によって分析した。1段階目は、「たいと思う」から「たい」への語形変化の検証である。これは、元の「たいと思う」の文が、願望表出の緩和機能をもつかどうかを検証するものである。すなわち、先行研究のとおり、「たいと思う」の「(と)思う」が緩和機能をもつとすれば、「たいと思う」を「たい」に置き換えても、願望を直接的に表現したことによって文の丁寧さに違いが生じるだけであり、文法的な容認性に問題は生じないはずである。したがって、「たい」への置き換えが文法的に容認される場合、その「たいと思う」は、願望表出の緩和機能をもつ。一方で、文法的な容認性に問題が生じる場合、願望表出の緩和とは異なる機能をもつとして、前者と区別できると考える。次に2段階目として、1段階目の検証によって「たい」に語形変化できなかった「たいと思う」の用例が、「たいと思っている」に語形変化できるかどうかを検証する。「テイル形」は動作や判断の継続を示し、それにより副次的に未完結性を表すことができる(湯本2004)。したがって、「たいと思っている」に置き換えられる場合、行為を実行するという判断が完結していないことを表すと考えられる。一方で、「たいと思っている」に置き換えられない場合は、発

話時点で対象とする行為を実行するという判断が完結していると考えられる。

以上の手順に則り、「たいと思う」の文の語形変化の制約を分析したところ、次の表2のような結果になった。

表2:「たいと思う」の語形変化にかかる制約

発語内 行為	発話と行為成立 との時間的關係	語形変化の例	「たい」	「たいと 思っている」	
表現型	行為成立が非現実的、非明示的	(1') (無人島に持っていきたいものについて話している) 子供の頃から馴れ親しんでる柴犬をできればなー{連れていきたいです}.	○	—	[1]
行為 拘束型	発話と同じ場面 内に行為成立	(2') (発表の冒頭に、発表の構成について話している) 発表内容の構成ですが、まず背景について述べ、次に対応付け、それからテキスト分割について説明します。そして、え、実験結果を挙げて考察し、{?最後にまとめた いです/最後にまとめたと思っています}.	×	○	[2]
	発話の直後に 行為成立	(3') 実際にそのニューラルネットワークを用いた {?本 手法について説明したいです/#本手法について説明 したいと思っています}. 本手法では、ニューラルネット ワークを用いている為に…	×	×	[3]
宣言型	発話と同時に 行為成立	(4') (ミーティングの進行役の発話) {#ミーティングを始めたいです/#ミーティングを始め たいと思っています}. いつものように定例報告を、A グループ長からお願いします.	×	×	

まず、表現型の「たいと思う」は、「たい」への語形変化が可能である。すなわち、表現型の「たいと思う」における「(と) 思う」は、緩和機能を持ち、その時の「たいと思う」は、願望表出の緩和機能をもつと結論づけられる。一方で、行為拘束型は、「たい」への語形変化によってできた文が不自然になり、宣言型の「たいと思う」は、よりその容認度が下がる。さらに、「たい」への語形変化に制限がある行為拘束型と宣言型では、(2') のように、発話と同じ場面内の行為を予告する場合、「たいと思っている」への語形変化が可能である。しかし、一方で、発話の直後の行為を予告する(3')、発話と同時に行為が成立する(4')では、「たいと思っている」への語形変化にも制約が生じた。これはすなわち、(2') は、発話時点で対象とする行為を実行するという判断が完結していないことを表す。一方で(3')、(4') は、対象とする行為の実行に対する判断が完結していることを示している。このような判断の完結性は、(3')、(4') の「たいと思う」がそれぞれ、「説明します」、「始めます」という動詞の基本形によって言い換えられることから観察できる。

以上の分析から、本研究では、「たいと思う」が願望表出の緩和機能(表の**[1]**)、未来の行為の予告機能(**[2]**)、事態進行機能(**[3]**)をもつと提案する。また、これらの機能は、発話と行為成立との関係が弱いものから強いものへ、語形変化にかかる制約が弱いものから強いものへ、と連続的に分布していると考えられる。

2.4 「たいと思う」の機能のプロトタイプと拡張

以上のように、「たいと思う」には願望表出の緩和機能、行為予告機能、事態進行機能があることが示されたが、本研究では、これらが、願望表出の緩和機能をプロトタイプとし、行為の予告機能、事態進行機能へと拡張されていると考察する。その理由は、願望表出の緩和機能は、構成要素である「たい」と「(と) 思う」の単純な合成によって得られる機能である一方で、行為の予告機能や事態進行機能は、「たい」と「(と) 思う」の合成によって得られる機能ではないためである。

さらに、この拡張の方向性は、事態進行機能に見られる「文法化」の特徴からも論証することができる。本研

究では、大堀（2002）の文法化の5基準を参考に、事態進行機能をもつ「たいと思う」が文法化し、ひとまとまりの表現になっていることを主張する。具体的には、事態進行機能をもつ「たいと思う」は、願望表出の緩和機能の「たいと思う」に比べ、語形変化ができないという形態の拘束性、願望の意味が漂白され行為の実行という点で意味が抽象化されているという意味のスキーマ性をもつ。これらの特徴は、願望表出の緩和機能の「たいと思う」には見られず、行為予告機能の「たいと思う」には、弱く観察できる。

2.5 機能拡張の要因

ここまで論じた「たいと思う」の機能拡張の背景には、助動詞「たい」の丁寧表現の欠如と、願望から行為実行への連続性という2つの観点があると考察できる。

まず、助動詞「たい」の丁寧表現の欠如である。湯本（2004：165）は、「実際に「～したいです」形を会話に用いると、「すわりの悪さ」が感じられ、そのような丁寧表現の欠如を補うために、緩和表現としての「(と)思う」が選択されると主張した。本研究も、この湯本（2004）の主張を妥当であると考えが、一方で、プロトタイプの機能である願望表出ではなく事態進行機能をもつ場合に、「たいと思う」の形態の拘束性が強くなることについては、事態進行機能の「たいと思う」が使用される場面の特性があると考えられる。すなわち、事態進行機能の「たいと思う」が使用されるのは、会議、発表といった社会的な場面であり、1人の進行役である話し手と複数の聞き手が存在する。このような場面の特性によって、単純に話し手の願望を表出する会話に比べて丁寧さが必要とされる。そのため、「たい」の丁寧表現の欠如を補うために「(と)思う」が付加された「たいと思う」という形式で顕著に固定化が進行したと推察できる。

さらに、2つ目の背景として、ある行為に対する願望からその実行表明へのプロセスと、本研究の主張する「たいと思う」の機能拡張の方向性の合致があると考えられる。野浪・孫（2009）では、次のように、意志の発生から実行へのプロセスが示された。

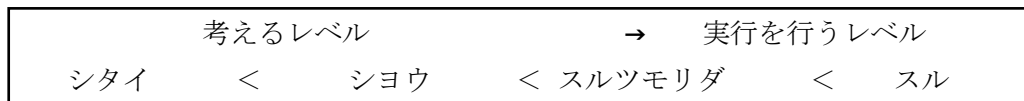


図1：野浪・孫（2009：49）による実行可能性の高低と意志表現の関係

本研究における、「たいと思う」の願望表出の緩和から行為予告、拡張の最も進行した事態進行機能への拡張の方向性は、野波・孫（2009）のプロセスに沿っており、自然な拡張の方向性を示していると考えられる。

3. 結論

「たいと思う」は、発話と行為成立の時間的關係と、その語形変化にかかる制約の2つの観点から、願望表出の緩和機能、行為予告機能、事態進行機能という3つの機能をもつ。それらの3機能は、願望表出の緩和機能をプロトタイプとして連続的に拡張されており、拡張の極にある事態進行機能では文法化の特徴が観察できる。さらに、この拡張の背景には、助動詞「たい」の丁寧表現の欠如と、願望から行為実行への連続性という2つの観点があることが示された。

参考文献

- 森山卓郎(1992). 文末思考動詞「思う」をめぐって 日本語学, 11(9), 105-106.
 野浪正隆・孫樹喬(2009). 中国人日本語学習者の「意志表現」についての理解状況—アンケート調査のクラスター分析結果— 大阪大学紀要, 58(1), 43-62.
 大堀壽夫(2002). 認知言語学 東京大学出版会
 斉藤幸一(2011). 発話機能としての《進行》に関する一考察 日本語コミュニケーション論集, 1, 113-120.
 Searle, J. R., (1979). Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts. Cambridge: Cambridge University Press.
 湯本久美子(2004). 日英語認知モダリティ論—連続性の視座— くろしお出版